

医療・介護 最前線

口から食べ、のみ込み、栄養をとる。人が生きるための基本の行いが難しくなる「摂食・嚥下障害」は超高齢社会の課題の一つだ。一カ所の病院や施設、家庭だけでは対応できず、地域ぐるみの取り組みが大切になる。川崎市南部地区では、医療と介護関係者が、職種や所属組織を超えて連携を進めている。

3月中旬、川崎市幸区の愛仁歯科医院の鈴木英哲院長(63)は、近くの女性患者(92)宅を訪ねた。摂食と嚥下のリハビリの訪問診療だ。

「歯ものどもきれいだ。肺もよく動いて、お元気ですね」。同行した歯科衛生士の本間久恵さん(48)の声がはずむ。鈴木さんは、看護師やヘルパーの日々の記録でケアが順調なことを確認。「のみ込みが、またよくなったね」と喜んだ。

女性は2年前に脳梗塞で市内の病院に入院した時、摂食障害になった。帰宅後、のどまで帯

研究会の世話人 13職種

神奈川摂食・嚥下リハビリテーション研究会は2008年、県内で、どの病院や施設、地域でも患者への良質な支援が提供できるようにと設立された。104人の世話人は、医療や介護、事務など13職種。相談窓口を41施設で開く。

どの職種でも分かるよう標準化した連絡票やマニュアルは全国各地で参考にされている。リハビリを進める施設では患者の肺炎が減り、在院日数も短縮している。

川崎南部地区も会のメンバー。県の会長の石井良昌・海老名総合病院歯科口腔外科部長は「多彩な職種がつながり地域を支える川崎は、会の理念の貴重な実践例だ」と話す。

支援 幸せ 食べる 口で

のみ込み障害



脳卒中から回復した患者のケア。口を清潔にし、保湿剤で入れ歯をなじませることで、元気に食べられる状態を保つ。まもなく地域の施設へ移る予定だ＝川崎幸病院

状疱疹が出てのみ込みが一層、難しくなり、体重は26キロにまで落ちた。介護する息子(63)は、地区の地域包括支援センターに相談したが、遠い相模原市の、嚥下の知識も乏しい歯科医を紹介された。

「行政に突き放された思い。『痛い。殺して』という母を抱え途方に暮れた」。息子はネット検索で偶然、口腔ケアに熱心な愛仁歯科医院を見つけた。主治医も変え、歯科と内科の協力で痛みをコントロールしながら栄養を摂取。ケアマネジャーやヘルパーら介護の支援も受け、症状が落ち着いていっ

た。のみ込み障害のあるお年寄りがかかりやすい誤嚥性肺炎の予防のため、鈴木さんは2000年に地元で口腔ケアの勉強会を始めた。口の中をきれいにし

て、細菌を減らし、発症を抑える。「しかし、まだまだ医療と治療が簡単でなかった」。そこで、「地域のお手本」を作るため、中核病院の川崎幸病院に働きかけた。同病院の佐藤久美子看護部長も10年前から、手術や退院後に起こる誤嚥性肺

炎の対策を模索していた。「これまで看護師は口への意識が薄かったが、体をふくのと同じように自然にできるようにしたかった」。09年3月から看護部と鈴木さんが共に、病棟での口腔ケアを始めた。

研修を重ね、今では455人の看護師全員が、患者の口の状態の評価とケアができるようになった。最大のポイントは、患者の口腔機能や栄養のとり方など27項目を分かりやすく一覧にした「連絡票」を病院の必須業務にしたことだ。連絡票を見れば、院内の全スタッフが理解でき、退院後もケアマネや家族の患者へのケアに役立つ。

連携を地域に広げるため、鈴木さんは12年、幸区医師会の中岡康会長(65)らと摂食嚥下の研究会を結成した。川崎南部各区の医師会、歯科医師会、ケアマネや訪問看護の連絡会など、医療と介護の団体が集まる。在宅医療を担う中岡さんも誤嚥性肺炎などの対策の必要を感じてきた。「特別な技術ではない。家族もスタッフも普通にケアできることを目指す。立場を超えて、顔の見える関係を作り、地域力を高めたい」

研究会の働きかけで、川崎市は今年度で全市で導入する在宅療養連携ノートに、摂食嚥下の連絡票を加えることになった。

諦めない姿勢に心打たれた

私の母は嚥下障害が進み、やむなく、おなかから栄養をとる胃瘻をつくって1年になる。病の進行もあり、口で食べる機能の回復は半ば諦めていた。楽しみを絶たれ、体が弱りゆく母のつらい時を思い、いつも苦しい。

記者の一言

今回の取材で、口腔ケアの新たな道を開き、切り開く皆さんの、志と熱意に心打たれた。90歳を超えてなお回復する方と、支えるご家族の姿に勇気をいただいた。可能性を信じて歩もうと思う。(吉村成夫)